

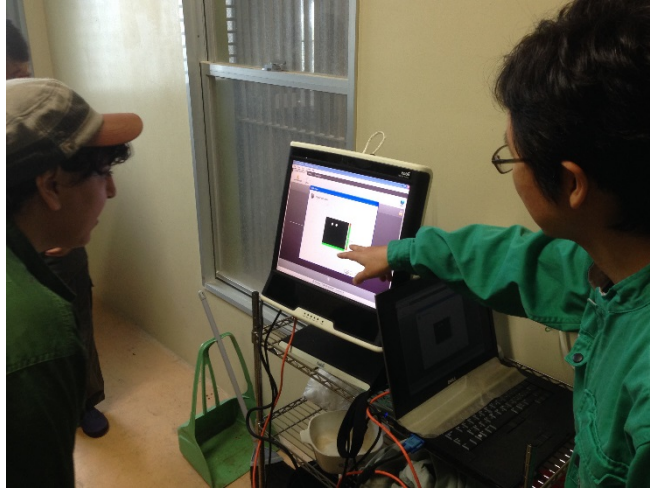
「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 7 月 7 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・修士課程学生
氏名	松島 慶

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
熊本県 熊本サルクチュアリ
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
野生動物・比較認知科学実習
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 6 月 17 日 ~ 平成 26 年 6 月 20 日 (4 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学 野生動物研究センター 熊本サルクチュアリ
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
[実習の概要] チンパンジーとボノボを対象とした認知実験や行動観察の手技を通して、実習によって比較認知科学研究のための基礎を学ぶことを目的とする。熊本サルクチュアリには 59 人のチンパンジー、6 人のボノボがおり、日々その自然の生息地でのくらしを守り、飼育下での健康と長寿をはかるとともに、人間の本性についての理解を深める研究がおこなわれている。
[実習の内容] 本実習では、実際に行われている実験として、タッチパネル実験、アイトラッカー実験の準備と観察を行い、それとともにボノボたちと、チンパンジーの一群の個体識別と行動観察を行った。また、飼育面の実習としてボノボとチンパンジーが生活している空間の掃除や竹(登り棒)の交換を行った。
[実習の感想] ・アイトラッカー アイトラッカーは頭に装置を固定し、それによる調査をイメージしていたのだが、本施設では、光の反射を利用し、被験者側には何も装着しないという装置を用いて実験を行っていた。確かに、こちらの方法のほうが被験者の負担が少なく済むので感心した。実際に自分も実験の被験者として体験させてもらったが、簡単な準備のみで実験を行うことができた。ただし、他の実験でもそうだが、データとして有効なものにするためには、多くの個体における多くの回数のデータが必要になるため、実習ではわずかな一面しか見ることができなかつたといえる。また、実験自体も成功させるために多くの努力(実験者側が怪我をしないようにするなど)が払われていることが紙間見ることができた。 ・個体識別 以前幸島や屋久島においてニホンザルの識別に挑戦したが、特に特徴がある部分が顔に集中しており、目を合わせると挑発になってしまうなどの理由から、非常に困難であったことを覚えているが、それに比べ、ボノボやチンパンジーたちは体の大きさや行動も識別の材料とすることができたため、ニホンザルよりも識別が安易であった。個体識別ができると、行動の一部が、他者とのやりとりからくるものであることが見えてくるので、よりいかに彼らがヒトに近い生き物かというものを感じさせられた。 本実習では行動観察を行い記録も行ったが、チンパンジー 1 人、ボノボ 1 人に対しての記録しか行わなかつたため、個人個人の行動の違いというものをはっきりと見ることができなかつたのが残念であった。 ・タッチパネル タッチパネルはすでに使用されているものが多く存在するが、本実習では、ボノボの飼育舎に新しく追加するというので、電気回路の構築から設置までを行い、さらに初めてタッチパネルに触れる個体に対する実験を観察した。初めて触れる個体には、より簡単な実験として、画面に円が表示されるものの、どの画面のどの部位に触れても報酬(小さくカットされたりんご)が与えられるというものを行った。このときは同舎にいた 2 個体同時に 2 機を用いて行った。結果としては、一方の若い個体はすぐに反応、学習を行い、何度も画面に触れるようになった。もう一方の老年個体は初めは興味はあったもののシステムがわからないようであったが、若者の個体の行動を観察して学習したのか、徐々にタッチパネルに触れるようになっていった。非常に面白い結果になったと思う。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



アイトラッカーを試す様子



タッチパネルに初挑戦するボノボたち

6. その他 (特記事項など)